

織物組織の発展から綴織組織をみたとき、比較的初期に現われた技術的に容易な組織として位置づけられ、いずれの地域においても早くから修得された技法であった。組織的には、平織の変化組織であり、簡単な機織具を利用するだけで製織が可能であり、多彩色の模様を描出することができた。ただ綴織組織は単一の組織構造だけでなく、緯密度の部分的変化、境界部分の絡合、輪郭線の挿入など、いくつかの変化組織が生まれるから、技法の変化とその採用方法に時代的特徴をとらえることができ、地域的比較も可能となる。

アンデス地帯における綴織組織の変遷は、組織調査の統計的処理によって得られたが、ここでは天野博物館所蔵品を中心として検討を試みた。その結果、少なくとも綴織は古期にあらわれた技法であり、また地域によっては全く出現しない文化圏もあり、ときには全く綴織が優先する時期もみられ、それぞれの地域的文化的特徴として、綴織の採用に差異がみられた。主要な特徴は、綴織組織における経方向の空隙のツナギ処理であり、東洋の綴錦などとの比較においても、独特な技法処理がみられることと、少なくとも綴織組織は、毛(アンデス地帯では獣毛)を中心とした技法であり、木綿では適当でなかったことは、我が国における織物発展過程のなかで絹の綴錦が時代的に断絶していることと比較して、理解することができよう。